論文審査の結果の要旨

氏名　田口洋美

本論文は、日本の中部・東北地方の中山間地域に居住するマタギと呼ばれる伝統的狩猟者集団と、ロシア沿海地方・アムール川流域およびサハ(ヤクーツク)に居住し狩猟・漁労・採集を主な生業とする少数民族(ウデヘ、ナーナイ、ウリチ、ニブヒ、エヴェン等)に見られる狩猟文化を、環境に対する適応手段としての狩猟システム・行動・技術の観点から相互に比較・検討し、その間には相似の環境利用の構造が存在することを明らかにした完成度の高い独創的な研究である。

本論文は、3 部構成をとり、序論では狩猟文化研究に関する先行研究例を解題しながら、問題の設定と方法について述べられている。列島の狩猟活動は、近世以降時代の政治経済的要請により換金商品(特に毛皮)の獲得生業として発展したが、それが先行研究においては、狩猟民俗としての側面に専ら焦点が当てられてきたこと。そのことに起因して、現在の野生動物の保全論等の環境論に対し、有効な研究視点を提供し得てないこと等を指摘する。

本論は、2 部構成からなり、第Ⅰ部では、日本の代表的なマタギ集落である新潟県三面、秋田県阿仁、山形県五味沢、長野県秋山を取り上げ、狩猟を中心とした生業活動の構造を、四季毎の生業暦としてまとめている。さらに、これらマタギ集落に共通する空間構造・季節的土地利用システムの内実と歴史的形成プロセスを明らかにしている。一方第Ⅱ部では、ロシア極東の少数民族集落を対象とし、国内の調査事例との比較可能な形で生業暦を提示している。また、集落は限られるが、日本同様季節的土地利用システムについて考察が加えられている。それによれば、ロシア極東という広大な自然環境の連続的な傾斜に対応した、換言すれば、利用可能な動植物等の資源構造の差異に対応した微細な資源利用システムの違いは見られ

るものの、それを越えた共通の季節的土地利用構造が存在することを指摘する。さらに、結論においては、ロシアと日本という歴史的・経済的コンテクストの違いを越えて存在する「環境と技術の重層的相似構造」仮説について考察をおこなっているが、その見通しはきわめて蓋然性が高い。

論文提出者の研究方法の特徴は、長期間にわたる現地での緻密なフィールド・ワークにあり、本論文で提示された膨大なデータは、そのほとんどが自らの調査の実践によって獲得されているため、きわめて説得力が高い。本編に付された152枚の図表類のほとんどは、論文提出者自らが作成したものである。その多くは、基礎資料として今後の研究に大きく寄与すると思われる。狩猟文化研究自体、著名なわりには研究の蓄積に乏しく、最近では環境保全論との関連で、理念的な理想像を仮設する議論が突出しているが、本論文は、そうした根拠の薄弱な議論に対して、きわめて大きな基礎資料を提供したことのみならず、生活者としての狩猟集団の歴史的・社会的・生態的コンテクストを明らかにしたことにより、今後の生産的な議論を可能とし、環境論に回収可能な地平を切り開いたと評することができる。

本論文は、列島の狩猟民俗としてこれまで専ら民俗学の中に閉じこめられてきた「伝統的狩猟集団」研究を、極東アジアの中に位置づけることにより、相対化を可能とした初めての研究である。列島の研究事例に対して、ロシア極東のデータにやや見劣りがあること、今日的な環境論への積極的発言が少ないこと等、不満を感じさせる部分もなくはないが、本論文の意義を損なうほどのものではない。

なお、本論文の本論第Ⅱ部のロシア極東の調査は、佐藤宏之・佐々木史郎等との共同研究(科研費補助金等)であるが、当該部分は論文提出者が主体となって分析および検証を分担・担当したもので、論文提出者の寄与が十分であると判断する。

従って本委員会は、博士(環境学)の学位を授与するにふさわしいと認めるものである。